

2024年11月3日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教15 「天からの命」

イザヤ55：8～11、ヨハネ3：31～36

ここは、この福音書におけるヨハネの最後の言葉になります。言わばヨハネの遺言です。この後ヨハネは、領主ヘロデに捕らえられ、最後は殺されてしまいます。ヘロデの結婚を批判したことから、その妻ヘロディアから恨みを買って、身勝手な理由で捕らえられ、しかも宴会の席で殺されてしまう。そういう最後を遂げた人です。イエスさまを信じ、その道を備えた人がどうしてそのような死に方をしなければならなかったのか。そういう疑問があるかもしれません。

しかし、この福音書が書かれた時代もそうですが、教会は迫害の中にありました。ヨハネ福音書は、紀元80～90年代に書かれましたが、特に90年のヤムニア会議以降、キリスト教は、ユダヤ教からは正式に異端として退けられます。ですからユダヤ教の迫害、ローマ帝国の迫害も一層激しさを増している中で理不尽な死を遂げた信仰者も少なくなかったと思います。この世の力、権力者の前に力なく倒れていく人々がたくさんいたのです。それは敗北ではないか。そういう人々は報われていないのではないか。少なくとも福音書は、そういう問いに対して答えを出す必要がありました。イエスさまはどういうお方なのか。イエスさまを信じるのがどのような救いをもたらすのか。洗礼者ヨハネは、最後に遺言として、そのことを明らかにして去っていきます。ヨハネの命をかけた戦いがそこにありましたし、またわたしたちの救い、命もそこにかかっています。

ここには、イエスさまがどういうお方なのかが示されており、「上から来られる方」「天から来られる方」（31節）と表現されます。さらに34節には「神がお遣わしになった方」とあります。そしてこのお方は「すべてのものの上におられる」（31節）と言います。これはイエスさまを真の神さまと言い表していることに他なりません。言わば、イエスさまを神さまと告白する信仰告白です。そして「御父は御子を愛して、その手にすべてをゆだねられた」（35節）ここには父なる神さまと子なるイエスさまとの関係が示されています。「その手にすべてをゆだねられた」のですから、父なる神さまと同じ力、権限を持っておられるのです。ここには教会の教理の言葉で言えば、イエスさまが真の神さまであられ、父と御子は本質が同じ、同質であることが言い表されています。

イエスさまがどのようなお方なのか。これはわたしたちの信仰において決定的に重要なことです。ここを間違えてしまいますと、わたしたちの救いがただこの世で完結するようなものになってしまいます。例えば、イエスさまが単に人間だと捉えるならば、やはり人間的な視点で、この世の富や成功のように救いを理解するようになるでしょう。そういう人間的な尺度で救いをはかるようになる。けれども聖書の伝える救いとは、そこに留まるものではありません。それは神さまとの関係のことだからです。人間は罪を犯して神さまとの関係が壊れてしまいました。聖書ではそれを罪と言いますが、この罪から救われること、神さまとの関係が回復されることが救いなのです。そのために神さまは大切な独り子イエスさまをこの世にお遣わしになりました。それは真の神さまがまるでその御手を地上へと伸ばされて、罪ゆえに苦しむ、罪の中に沈んでいくわたしたちを捕まえてくださるようなことです。天から地上に伸ばされた神さまの御手こそ、イエスさまなのです。

来月は12月、もうクリスマスです。どうして教会は毎年クリスマスを祝うのか。それは神さまがわたしたちをお見捨てにならず、天からこの地上に御手を伸ばされた出来事だからです。神さまは愛する独り子イエスさまに救いのすべてを託されてこの世にお遣わしになられました。本来ならば、罪ゆえに神さまと絶縁状態なのです。でも神さまの方から天を裂いて、この地上に御手を伸ばしてくださった。和解の道を開いてくださった。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された」(3:16) どんなに罪深いわたしたちをも、なおも赦し、愛し続けてくださるその神さまの愛が明らかになった出来事、それがクリスマスです。だからわたしたちは今年もクリスマスを祝います。

そしてこのイエスさまによって開かれた神さまとの和解こそ「永遠の命」に他なりません。「御子を信じる人は永遠の命を得ている」(36節) 教会の信仰告白、使徒信条でも「永遠の命を信ず」と告白します。「永遠の命」とは何でしょうか。それは不老不死のような、この地上の命が長く続くことではありません。多くの人はいそれを願っているかもしれませんが、ある人は、この地上の命が永遠に続くなら、それは生き地獄でしかないと言います。この罪のままで永遠に生き続けるならば確かにそうでしょう。憎しみ、争いが絶えない人間の悲惨を永遠に負い続けることは苦痛でしかありません。それは「神の怒り」を負い続けることであり、永遠の命の対極にあるものです。

ここで何より心に留めたいのは、イエスさまがこの人間の罪の悲惨、神さまの怒りを負ってくださったことです。その怒りゆえに人間は死に定められたものになりました。約束を破ったアダムに対して神さまは「塵にすぎないお前は塵に返る」(創世記3:19)と言われ、アダムは樂園を追放されました。永遠の命から締め出されたのであります。けれどもイエスさまがその神さまの怒りをお引き受けくださって、十字架で死んでくださった。そして三日目によみがえられ、天に昇られて、神さまとの和解の道を開かれました。

洗礼者ヨハネは、最後にその永遠の命の幸いを言い残して去りました。それがすべてであり、そこに希望を置いていたのです。わたしたちもそれでいいのだと思います。どんなにこの世で富を得ても、成功しても、なお神さまの怒りにあるならば、それは平安でしょうか。神さまがこのわたしを赦して、天の樂園に招いてくださる。イエスさまがその約束をつけてくださった。このことだけで十分ではないでしょうか。イザヤ書の御言葉を読みました。「わたしの口から出るわたしの言葉もむなしくは、わたしのもとに戻らない。それはわたしの望むことを成し遂げ、わたしが与えた使命を必ず果たす」(55:11) この生ける神さまの言葉こそイエスさまです。イエスさまは神さまのもとを出て、その使命を果たしてくださいました。そこにわたしたちが信じるすべてがあります。

天の父よ。あなたに背いたゆえに、あなたの怒りをかっている者であります。けれどもイエスさまがその怒りをすべて引き受けて十字架で死んでくださいました。そして三日目によみがえられて、永遠の命を与えてくださいました。そこにすべてがあることを信じさせてください。主の御名によって祈ります。アーメン。